

第3章 平城宮出土墨書土器について

既刊の『集成I』『集成II』の資料とあわせて、これまで平城宮跡から出土した墨書土器および出土傾向について概略する。

掲載資料の年代 『集成』に収録された墨書土器は奈良時代を中心とする平城Iから平城VIIに属するものである。基幹排水路などからまとまって出土した土器の大半は奈良時代後半（平城IV～V）のもので多く、それ以前の資料は少ない。溝の浚渫の結果、それ以前の堆積層が残っていない可能性も考慮しなければならないが、後述するように官衙が集中する地区で、官衙名を記した墨書土器や習書土器などの

内容をもつ、まとまった資料が蓄積されたのは、奈良時代の後半の様相を反映していると考えられる。

また、平安時代に下る資料は井戸に投げ込まれたものや、廃絶した園池に投棄されたもので、奈良時代のものとは性格を異にすると見たほうがよいだろう。

墨書土器の出土傾向 平城宮から出土した墨書土器の分布は、平城宮内の官衙のありかたや空間利用を考える上で興味深い。第2次から第316次調査で出土した墨書土器の点数を、各調査区ごとに濃淡で示した (Fig.9)。宮内全域より墨書土器は出土しているが、内裏東方地区の東側から東院地区の西側に集中していることがわかる。

Fig.7に墨書土器が出土した遺構の性格と割合を示す。遺構からの出土が多い傾向が指摘できるが、これは包含層から出土する土器が比較的小片で、残存状況が良くないなどの理由が考えられる。

墨書土器の8割強が宮内基幹排水路を中心とする溝から出土しており、続いて土坑が多い。溝や土坑から出土する墨書土器は、他の土器などと共に投棄されたものであろう。墨書

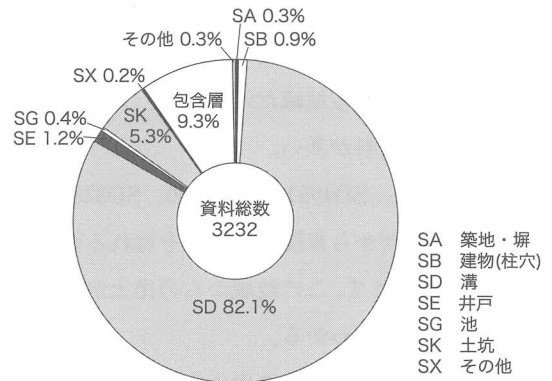


Fig. 7 出土遺構の種類別割合

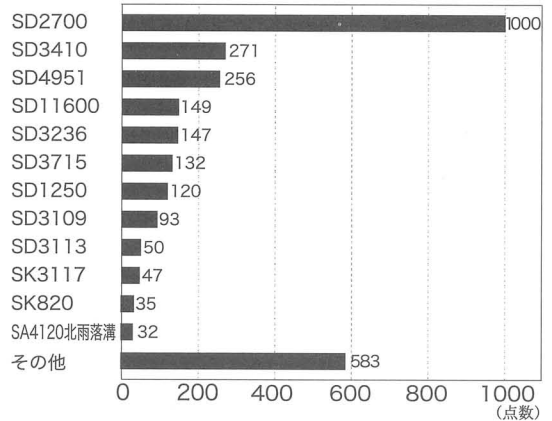


Fig. 8 遺構別墨書土器出土点数



Fig. 9 平城宮内墨書土器の出土量

土器が多数出土した遺構は、土器自体の出土点数が多く、墨書率に大きな偏りは指摘できない。

墨書土器がまとまって出土した主な遺構と出土点数をFig. 8に示す。内裏東外郭官衙と内裏東方官衙との間を南流する基幹排水路SD2700が圧倒的に多い。官衙が密集する地域だけあって、習書土器や転用硯といった資料が多い。

続くSD3410、SD4951、SD11600、SD3235は、いずれも東方官衙から東院地区西方を流れる溝であり、SD2700も合わせて、この地域からの出土が圧倒的多数を占めることがわかる。

他方、SD3715は平城宮の中央を南北に通る基幹排水路であり、調査された面積も広いが、墨書土器の出土点数は132点にとどまる点は注目される。

墨書土器の種類 器種ごとの墨書土器の点数および割合をTab.1、2に示す。なお、須恵器と土師器以外の資料については割愛した。

『集成』に収録された墨書須恵器・土師器の点数は、3227点であるが、平城宮跡より出土した奈良時代の土器の全体数は膨大である。出土土器の総数に照らした場合、墨書土器は稀少な存在であることは言うまでもない。

須恵器と土師器の割合は、土師器1121点に対し、須恵器は2106点を数える。SK820⁽¹⁾(平城III)、SK219⁽²⁾(平城IV)など、奈良時代の基準資料となる土器群の集計をみると、土師器の個数が須恵器を上回る場合が多い。土器全体の割合と比べ、墨書土器は須恵器の割合が高い傾向を指摘できる。

器種ごとの比率をみると、土師器の9割は杯類が占める。他の1割は、高杯、甕、杯B蓋、盤、蓋、鉢、壺などの多様な器種で占められる。杯蓋、高杯、甕が若干多い。甌や竈など大型の器種を除いて、ほぼ全ての器種が含まれるが、いずれも少数である。

須恵器では杯類63.4%と杯蓋類28.6%で9割を占める。他の1割は、多様な器種で占められ、土師器と同様の様相を呈する。若干、壺類と甕が多いが、平城宮から出土する一般的な器種構成比と比較すると、その割合は少ない。

Tab.1 墨書須恵器 器種別比率

			杯A	299	14.2%
			杯B	481	22.8%
			杯C	6	0.3%
			杯E	2	0.1%
			杯F	2	0.1%
杯類	1335	63.4%	杯	126	6.0%
			皿A	10	0.5%
			皿B	8	0.4%
			皿C	31	1.5%
			皿	14	0.7%
			椀	6	0.3%
			杯または皿	350	16.6%
蓋	602	28.6%	杯B蓋	586	27.8%
			皿B蓋	16	0.8%
高杯	5	0.2%	高杯	5	0.2%
壺類	59	2.8%	壺	57	2.7%
			平瓶	2	0.1%
壺蓋	5	0.2%	壺蓋	5	0.2%
鉢	12	0.6%	鉢	12	0.6%
盤	16	0.8%	盤	16	0.8%
甕	59	2.8%	甕	59	2.8%
不明	13	0.6%	不明	13	0.6%
計	2106	100.0%	計	2106	100.0%

Tab.2 墨書土師器 器種別比率

			杯A	49	4.4%
			杯B	32	2.9%
			杯C	19	1.7%
			杯	23	2.1%
			皿A	106	9.5%
			皿B	3	0.3%
杯類	1013	90.4%	皿C	5	0.4%
			皿	5	0.4%
			椀A	78	7.0%
			椀C	14	1.2%
			椀X	1	0.1%
			椀	39	3.5%
			杯または皿	639	57.0%
蓋類	24	2.1%	杯B蓋	20	1.8%
			皿B蓋	1	0.1%
			蓋	3	0.3%
鉢	3	0.3%	鉢	3	0.3%
高杯	34	3.0%	高杯	34	3.0%
壺	3	0.3%	壺A	3	0.3%
盤	6	0.5%	盤	6	0.5%
甕	31	2.8%	甕	31	2.8%
不明	7	0.6%	不明	7	0.6%
計	1121	100.0%	計	1121	100.0%

Tab.3 器種別各部位への墨書率

	資料数	口縁部内面	口縁部外面	底部内面	底部外面		
須恵器杯類	1335点	25(1.9%)	181(13.6%)	105(7.9%)	1072(80.3%)		
土師器杯類	1013点	31(3.1%)	88(8.7%)	77(7.6%)	865(85.3%)		
		口縁部内面	口縁部外面	頂部内面	頂部外面	つまみ	
須恵器蓋	602点	3(0.5%)	7(1.2%)	206(34.2%)	391(65.0%)	21(3.5%)	
土師器蓋	24点	0(0%)	1(4.2%)	9(37.5%)	13(54.2%)	2(8.3%)	
		杯部内面	杯部外面	脚部内面	脚部外面		
須恵器高杯	5点	0(0.0%)	0(0.0%)	5(100.0%)	0(0.0%)		
土師器高杯	34点	11(32.4%)	9(26.5%)	5(14.7%)	11(32.4%)		
		口縁部内面	口縁部外面	体部内面	体部外面	底部内面	底部外面
須恵器甕	59点	2(3.4%)	5(8.5%)	16(27.1%)	30(50.8%)	0(0.0%)	1(1.7%)
土師器甕	31点	0(0.0%)	4(12.9%)	3(9.7%)	22(77.4%)	0(0.0%)	0(0.0%)
		口縁部内面	口縁部外面	体部内面	体部外面	底部内面	底部外面
須恵器壺	59点	1(1.7%)	2(3.4%)	3(5.1%)	27(45.8%)	1(1.7%)	28(47.5%)
土師器壺	3点	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1(33.3%)	0(0.0%)	2(66.7%)

墨書部位と記載内容 主な器種について、墨書部位の割合をTab.3に示した。墨書部位が数ヶ所に及ぶ場合は、それぞれを1点として数え、資料数に対して延べ数となる。

この集計によると、須恵器、土師器ともに杯類では8割が底部外面に墨書されている。底部から口縁部まで残存する資料に限っても、底部外面への墨書率は約8割を数える。杯蓋類への墨書は、約6割が頂部外面、約4割が頂部内面に施されている。須恵器杯蓋の頂部内面に墨書されるケースは、内面を硯面とした転用硯に習書した類の資料が多い。つまみに記す例も若干みられる。須恵器の甕類は体部内面が3割近い数値になっているが、これは割れた後に硯に転用され、習書された資料である。土器として使われていた時点での墨書箇所は体部外面が多いとみてよい。

記載内容と墨書土器 墨書土器の記載内容、器種、部位の相関関係は、土器に墨書する動機を考えるうえで重要な役割を果たす。

墨書の記載内容は多様であるが、「×」などの記号や「大」など一文字を記すものが大半を占める。一文字だけの記載も、「式」「兵」「官」などの存在から、官衙などを示す略記号であった可能性が考えられる。また規格性の高い杯皿類の底部外面ないし口縁部外面に記されるケースが多いことから、使用者や数量などを示す目印の可能性もある。内容物を記したと思われるものは「酒坏」「水坏」などがある。「酒」「水」「酢」などが書かれた杯類の器種に一定の偏りは見いだせない。

官衙名を記した墨書土器に須恵器が多いことは以前から指摘されてきた⁽³⁾。「宮内省」「刑部省」「式部省」「雅楽寮」などの官衙名を記したものと、「厨」「内木工所」「大炊」などの機関名を記したものは合わせて152点にのぼる。内訳は須恵器121点、土師器31点であり、圧倒的に須恵器が多い。杯類が大半を占める。

明らかに習書や楽書とみられる資料は、須恵器37点、土師器31点、合わせて68点である。須恵器の約7割が杯B蓋であり、土師器は皿Aが半数を占める。土師器皿Aは円面硯などの蓋として使用されていた可能性も考えられる。須恵器杯Bや甕でも習書がみられるが、この場合は転用硯であることが多い。

(1) 奈良国立文化財研究所『平城宮跡発掘調査報告II』(学報15) 1962

(2) 奈良国立文化財研究所『平城宮跡発掘調査報告VII』(学報26) 1976

(3) 巽淳一郎「都城出土墨書土器の性格」(奈良文化財研究所『古代官衙・集落と墨書土器—墨書土器の機能と性格をめぐる—』)

Tab.4 本書掲載墨書土器出土遺構一覽

次 数	調査年度	出土地区名	墨書土器出土遺構
第170次	1985	6ABB-F	SD3715
第171次	1985	6ABJ-A, B・6ABW-A	SD3715・SD12540・SB12544
第172次	1986	6AAC-J・6AAD-E	SD2350・SD2700・SX12787・SX12792・ SA12800・SB12825・SA12907・SX12913
第174-2次	1986	6ALA-M・6AAA-C	SD12975
第176次	1986	6ABV-C	SD9171B
第177次	1986	6ACC-D	
第188次	1988	6AAU-B	SE13330
第192次	1988	6ABR-F	SD13402
第194次	1988	6ACP-H	SX13513
第206次	1989	6AAY-H	SD13731・SK13790
第216次	1990	6AAY-G	SK14445
第220次	1990	6AAY-G	
第222次	1992	6AAI-A	SD11620・SE14690
第236次	1992	6AAI-B	
第241次	1993	6AAD-P・6AAF-P・6ALP-K	SD3035・SE15800・SD15812・SD15816・ SD15817
第242-4次	1993	6AAB-B	
第243次	1993	6ALF-A	SD16040
第245-1次	1993	6ALF-A	SE16030・SD16040・SD16045
第245-2次	1993	6ALF-C	SD8436・SD9040・SD16300・SD16301
第250次	1995	6AAD-O・6ALP-J	
第259次	1995	6AAD-J, O・6AAE-N・6ALQ-I, J, O	SD11600・SD16731・SD16741・SD16742
第270次	1996	6ALS-D	SE17445
第274次	1996	6AAI-B	SD3410・SD4951・SD17650
第276次	1996	6ALF-A	SG5800B
第280次	1997	6ALF-A	SD5200・SD17584
第284次	1997	6ALF-A	SD5200
第292次	1998	6ALR-F	
第295次	1998	6ABP-I	
第298次	1998	6ACP-M	
第301次	1999	6ALF-A・6ALS-C	SD5200・SD16040・SK18090・SB18100
第305次	1999	6ABP-I	SX18160
第315次	2000	6ACC-L	SD3825・SD16040・SD18219
第316次	2000	6ACC-N	SD3825・SD12965・SX18256